
Fate/zeroにつっこんでみた

BIN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / z e r o に つ つ こ ん で み た

【Nコード】

N 9 8 3 3 X

【作者名】

B I N

【あらすじ】

とある理由で家出を結構する事にしたアギ。

追手の手から逃げる為世界を超えて時間も超えて時空も超えて旅立つてみたら…

何か巻き込まれちゃった。

このお話は次に続く物語。

全てを焼かれた少年へと続く物語

故に、変わる事は有れど、結末は変わらない。

人が死に、その屍さえ踏みにじられる。

誰も彼もが願いを求める。そんな戦争をなんだかなあと思いながら
時々手を出す男の物語。

そんな話が苦手な方は戻るを。 原作を大切にしたい方も戻るを。

キャラが違う、崩壊する。 そんなの関係ないねと思う方のみお読み
ください。

苦情は一切受け付けません。

プロローグ

さあ、話をしよう。

終わってしまった物語がある。其処には主人公やヒロインが居て、ソレに対をなす悪役が居る。

悪役が正義であったり、主人公がダメ人間だったり、ヒロインが複数いる上に人外であったりする馬鹿みたいな物語りが終わったんだ。物語の最後は大抵めでたしめでたしで終わるのだが…ソレはその物語を書いた作者に因るだろう。

人の善し悪しも在る。

そんな終わった筈の物語りの登場人物は基本的には役者である…が、その枠を超えた時その役者は作者でも観客でも無いモノに成る。

主人公で在り悪役で在りヒロインで在りライバル。それ以外の者にも成れるイレギュラーに成る。

魔法が存在する世界に生まれた。だが、他の世界ではソレは魔術と呼ばれた、法術と呼ばれた、さまざまな呼び方をされた。

問いたい。

魔法を知る者が他の術を知りたいと思うのは…行けない事だろうか？

問いたい。

未知を知りたいとする心は、想いは罰せられるべき事だろうか？

私はそうは思わない。故に私は彼を放置する。

っーか。無理。手に負えません。好きにしなよお…

コレは作者が手を上げた勝手に動き回る者の物語り。

語られていない章がある癖に語られる先のお話し。

あなたはページを捲りますか？

緑溢れ、穏やかな気候の中清々しい青空が広がる世界が在る。

其処には種族関係なく暮らす者達が居る。過剰戦力にオーバーテク
ノロジー。『外』から攻めてくる邪神やその他もなんのそのと撃ち
落とす。在りえない位の武力を誇る世界がある。

宇宙とは言わない。そもそも宇宙が無い。其処には世界しかない。星と言いかえればソレも正しい。

竜や霊鳥が跳び、天使がせつせと洗濯を行い、神々が畑を耕し、悪魔が種を巻き、獣人が狩りを行い、妖精、精霊が養蜂や掃除を行い、人間が釣りなんかしている。メチャクチャな世界がある。

名前は無い。強いて言うのなら混沌、敢えていうのなら楽園。そんな世界に有る城のバルコニーから物語が始まった。

「エヴァさんのアホォー！！ もうちょっとしたらもっと美味しくなるのに！！」

老け気味の顔面に白髪交じり赤い髪の青年が、半分泣きながら地下室にダッシュする。

「先に私のアイスを食べたのはお前だろうが！！」

ウィングラス片手にうがーと両手を上げて怒鳴る幼じ…少女が顔を真っ赤にして青年の背中に言葉を投げつける。

「ハア…懲りないね。二人とも」

「まあ、らしいっちゃらしいネ。」

「ケケ、何時もの事だろう？」

長い黒髪を後ろで一纏めにした浅黒い肌の少女が苦笑しながら手に持っていた匙を口に運び、やれやれと首を横に振るいながら中華ド

レスを身に纏った少女がゴマ団子を齧る。

最後に、本来ならば在りえないライトグリーンの長髪を指で弄りながら一杯ひっかけている女が嬉しそうに言った。

青年の名をアギ・スプリングフィールド。幼女の名をエヴァンジェリン。浅黒い肌の少女の名を真名。中華ドレスの少女の名を鈴音。最後の女の名をチャチャゼロと言う。

「…あの、以前も似た様な事でアギ様が七十年程家出したのですが…」

そして、その光景を見ながら頭に過った事を言った者の名を茶々丸と言う。

「「「あつ?!」「」」」

「家出してやるー!!」」

「まてえ!! お前はまたソレで仕事をサボる気がコラア!!」

アギ・スプリングフィールド。丁度四百歳に成る年の春の出来事であった。

一話（お久しぶり、アギです）（前書き）

シュゴオオイ！！コレハヒドイヨ！！

一話（お久しぶり、アギです）

雪風が吹く。誰もが家の中で暖を取るであろうに、男と女は大聖堂の中にいた。

ビュウビュウと壁を、ドアを窓を屋根を叩く風と雪の音は、まるで生者を常闇の中へ引きずり込む様な魔の声を連想させる。

聖堂に反響する。

誰も居ない、二人だけしかない聖堂に反響する。

男はそつと聖堂の床に蒼と金で出来た一つの鞘を置いた。

美しい。その鞘は美しい。幾年の年月を経ても変わらず美しく、偉大なる鞘はそつと雲の合間から顔を現した月の光を反射した。

月の光は鞘以外にも光を与えた。

女の髪がきらりと光った。銀、月の光を浴び透き通る様な神秘的な輝きを放つ白銀の輝きに男の頬が一瞬緩んだ。

赤い瞳と男の黒い瞳が合う。其処に幾つの言葉隠れて居たのだろうか？ 二人はコクリと一度頷いた。

男が口を開いた。幾つ物言葉を放つ。閉じよと満たせと言の葉が舞う
不思議な事に鞘…否、鞘を置いた床から光が溢れだす。

男は言葉を強めた。

——誓いを此处に——

——我は常世総ての善と成る者

——我は常世総ての悪を敷く者

——汝三大の言霊を纏う七天——

——抑止の輪より来たれ、天秤の守り手

よ

光は集い、極光と成りて金色を生みだす。

蒼き装束に銀の甲冑を身にまとい、まるで剣を持つかのように何か
を振るった。

エメラルドの瞳が男と女移し、少年の様な少女が口を開き

「問おう。貴方が私のマ」あの…重いのでどいて下さい」「すう?!」

一人の被害者が全てを台無しにした。

時を戻そう。コレは被害者。アギ・スプリングフィールドが何故召喚された者の下敷きに成ったかの話だ。
話は簡単だ巻き込まれた。

地下室へ逃げ込み、大急ぎで装備を整えて突撃隣の晩御飯なノリで世界から逃げ出す。

念の為に、遙か過去、初子の出産に立ち会う為に覚えた時間跳躍まです使った上に厄介事（アトラス的な）に巻き込まれない為別の世界群の方へ逃げたのだ。

流石に家出で別世界へ行く等普段なら絶対にしないが、理由がある。エヴァンジェリンがアイスを食べられた腹いせに勝手に開けたワイン。実はアギがエヴァとの結婚記念日の為にこつこつと材料を集めて作ったワインだったりする。

結婚記念日まで後二カ月。丁度その時期に最高に美味しくなるように仕込んでいたものだった。

逆にアギが食べたアイスマンと同じでエヴァンジェリンが結婚記念日の為に丹精込めて作っていた物の雛型だったりする。

似た者夫婦である。にっちやにっちや

まあ、そんな事は知らないのではとも言えないが。世界から逃げ出したアギは天文学的な数値で在りえない位の事故に遭う。

端的に言う交通事故だ。召喚されるモノが偶々その世界の壁を越えようとしていたアギを巻き込んだのである。

因み、アギもこの事故を起こした事が有ったりする。その時、エセ中国人兼火星人はこう訴えた。

「体を固定されて、ミキサーに掛けられた様な気持ち悪さと同時に空間を超える際に発生する振動で内臓が逆さまに成った様な感覚が全身を襲った後から腹筋がツツた様な感覚が広がってその最中に何故か人生でも最大規模の便意と尿意が襲ってくる」

と、とある常夏の密林で機械カシオペアの残骸を背景に涙ながらに訴えた事がアギの脳裏に思い出され

（もうすぐ400歳に成るのに漏らしとか……死んだかも知れんね！！）

とか現実逃避をしていたりする。

因みに、その場にいた人間に最初に言った事は

「トイレは何処っ…だっ！！」

で、ある。生まれたての小鹿の様にプルプル震えながら…名誉のため言っておこう。漏らしませんでした。

そんな邂逅から略一日過ぎた頃から話を進めよう。

突然現れた…正確には巻き込んでしまった？ 男の子と言っても良い姿の男に衛宮切嗣は何とも言えないモノを感じていた。

畏怖は在る。ハッキリと言ってしまおう。サーヴァントと召喚したら魔法使いも一緒に来たでござる。

何だこれ？ 何ソレ？ とか思うのも仕方がない。しかもサーヴァントとしてとか本当にどうしたモノか。霊体化は出来ない生身だがハッキリと言って人間が立ち討ち出来る相手では無い。

無詠唱で空を飛ぶわ、冬に春の花を咲かせるわ影から多量の薬やら魔導書を取りだす上に何故か娘が懐いている。

「どうしたモノか…」

そう吐く切嗣に何処か楽しそうな声色で女…妻であるアイリスフィールが言う。

「さあ？ でも良いんじゃないのかしら。イリヤも懐いてるし私もあの子はいろんな意味で楽しい人だと思うわ」

コロコロと喉を震わして笑いを堪えて居るのは最初の出会いが在るからだろう。実際に今思い出せば切嗣も声が漏れそうに成るの堪えるしかない。

真剣な瞳、青白く成った顔色、震える体、此方にまで聞こえてくる荒い呼吸。そんな姿でトイレは何処だ！！ とつま先立ちで歩くあの魔法使いに切羽詰まった声で言われたのだ。

何処の喜劇だコレは？ 思わず自分が紹介したサーヴァント…騎士王の存在さえ忘れてしまった程だ。切嗣は思う。本当にどうしよう…二重の意味で。

己のサーヴァントとは簡単な自己紹介の様なモノはしたが絶対に反りが合わないと確信した。だが、この魔法使いとは思いの外合うのだ。

思えばこの魔法使いとの自己紹介もオカシナ物だった。

名乗ろうにも出て来た言葉が

「衣食住を要求する！！ 漏れるかと思った！！ 漏らすかと思った！！」

と涙目で言われたのだ。何よりも凄みや威圧感と言うのが無いのが困り所だった。普通の少年に見えてしまう。実際にちゃんと自己紹介が出来たのはこの異常を感じたアインツベルン当主、ユーブスタクハイト・フォン・アインツベルンが当事者（被害者？）である魔法使いと話し合いが終わるまでは何も出来なかったのだから。

その後で見た御当主はかなり老け込んで見えた。その場に居なかった幸運に感謝しよう。何よりも、彼…魔法使いのマスターが…

「あつ、ごめんなさい切嗣。イリヤが寝ちゃったみたい。サマナーから呼ばれてるから少し行ってくるわ。」

よりも困って自身の妻なのだ。

最初は令呪で自害をさせれば良いと考えたが…その令呪が効かない反則存在が妻のサーヴァントなのだから本当に困る。

そんな事に頭を悩ませて時に入った朗報が、教会・協会共にこの魔法使いのと妻の事を確認出来て居ないと言う事だった。イレギュラーなのは解るが理解が追いつかなかった。

つまり、マスターが衛宮切嗣が知るだけで八人居るのだ。ルール違反にも程がある。そのルール違反と御当主から教えられたのが…

「客人と戦わなくとも良い。元より客人とは中立であり聖杯を降ろすのに必要なのは六体のサーヴァントを下せば良い。」

「まあ、俺は傍観者って言うか観測者って言うか…敵対したり気に入らない奴だつたりしなければ何もしないさね。めんどくさいし。戦争とか嫌いだし、痛いし面倒だし危ないし面倒だし。」

と、言う事だ。

ハッキリ言ってしまうえば衛宮切嗣は魔法使いに恐怖を覚えて居る。同時に共感出来る所もあり、好意も在る。恐らく彼に敵対すれば人間等あつと言う間に殺されてしまうだろう。そして、何よりも困っているのが

「イリヤが懐きすぎなんだよなあ…親としても僕より上か…」

はあ、とタメ息を吐いてタバコに火を付ける。

（親として上…か、今更何を思っているんだろうか？僕は娘から母親を奪う為に殺し合いをしなくてはいけないのに…）

雪風の吹く夜はどんよりと暗く。月さえ顔を隠していた。

アイリスフィールは眠りについた我が子を抱き、ワイン片手にこの世界の魔導書を嬉々として読んでる少年の様な老人の様な青年の様

な魔法使いに視線を向けた。

時折聞こえる娘の寝言は何処までも楽しそうで、一体どんな夢を見て居るのかと思ってしまっただ。

「ねえ、サマナー。イリヤどんな夢を見て居るのかしら？」

「…？ あつ、俺か。」

その反応にクスクスと笑ってしまう。

彼を監視するように佇んでいるセイバーがあとタメ息を吐いていた。

「サマナー、貴方も慣れなさい。正規のサーヴァントで無いとはいえそれでもアイリスフィールのサーヴァントですか」

「いやいや、アギさんは戦いませんよ？ 観戦はするけど他はノータッチ！！ 故に護衛もさせぬ。」

「貴方は！！」

「良いのよセイバー。彼はそう言った存在で、私にとって…私達夫婦に取って娘に少しの間だけ素敵な思い出を作ってくれる魔法使いで良いの。」

激昂しかかるセイバーを窘めてから、アギに再び聞く。

「ん、その思いでも人生の中では百分の一にも満たない時間なんだけどねえ。たぶんモンスターハンターしてる時の愉快的日常とか冒険とか見てんじゃね？ 古龍とかとも戦ったし、都市防衛戦とか

もけっこうしたしねえ。」

あつ、セイバーうずうずしてる。私と同じね。物凄く見たいわ。自分の知らない世界の事、切嗣も知らない世界の冒険。

「ねえ、私達も途中参加出来る？」

「アイリスフィール。有難いですが私にも護衛と監視が有ります。」

「良いんでね？ 魔導書読むのに朝ぐらいまで掛かりそうだしOK OK。」

「ちよつ待ち」

私には其処までしか聞こえなかった。彼がパチンと指を鳴らした時には私は夢の中へ旅立っていた。イリヤに少し怒られちゃったけど楽しかったから構わないわ。

セイバー。アルトリア・ペンドラゴンはキツと鋭い視線でアギと呼ばれた魔法使いを睨んだ。

「そう睨むなよ騎士王。こちらら餓鬼の頃はアンタの英雄譚を聞いているしアンタの国のその遙か後の国で生まれてんだ。変な事はしてねえよ。エクスカリバーとか怖いし」

「私は貴方を信じる事は出来ない。」

何よりもこの男は平気な顔で嘘を吐いている。隙があれば私も眠らせる気だったに違いない。クラスとしての魔術防御なんて無視出来る何かを持って居ても可笑しくない。魔法使いなのだ。

私は知っている。アイリスフィールが簡単な魔術を手解きしている時に語った一族の悲願。到達するべき事を事も何気に「んじゃ、やり方教えようか？」と事も何気に言い放ったのを。

アイリスフィールにも葛藤は在っただろう。少しの逡巡から「いいわ。」と答えた。この男はソレを笑顔で頷いた。この時に解った。

この男は今の時代の魔術師と変わらない。己が目的の為には外道も行う。ソレを咎めたりはしない。

だから、この男を信じれない。この男は平気な顔で後ろから刺す事の出来る奴だ。

「まあ、いいけどねえ。それよりも、見つめられてると気が散るからコレでも見てなよ」

そう言い、私に水晶玉を投げて寄越したその中にアイリスフィール達親子を見てしまい手に取ってしまった。

ああ、だからこの男は信用できないその代わり生命の信頼は出来る。抗えない眠気の中、私にはそう思う事しか出来なかった。

はあゝ…また面倒な事になっちゃたなあ。あつ、どうもお久しぶりです。アギです。

夫婦喧嘩で家でしたら召喚に巻き込まれました。

巻き込まれた世界がアレですFateでしたしかも四次。敵がラスボス級なんで観戦します。ええ観戦させていただきます。桜の救出？ 大聖杯の破壊？ なにそれ？ そんな事したら次に繋がらないだろ！！

まあ、面白そうだから見に行くけども。実際の所内容なんて知らないよ。何百年も前の記憶何て覚えてねえよ。

まあ、何時でも逃げられますから生命の危機は生まれた頃より大分少ないね！！

うん。無理やりテンション上げてみたけどキツイね。普通にするわ。ああ、うん。また何だ。先ずこのステータスを見てくれ

【CLASS】 召喚師

【マスター】 アイリスフィール・フォン・アインツベルン

【真名】 アギ・スプリングフィールド

【性別】 男性

【属性】 中立・中庸

【ステータス】 筋力B+（A++） 耐久B 敏捷B（EX） 魔力

■ 幸運D 宝具EX

【クラス別スキル】

陣地作成：A

自らに有利な陣地を作り上げる。

工房の作成が可能。

魔力活性

呼び出したモノ達の能力をワンランクアップさせる。

自身の魔力攻撃に+の威力を加える。

無詠召喚

アクションなしで召喚が出来る。生物・無生物の関係はない。

【保有スキル】

魔法薬生成：EX

材料さえ有ればあらゆる魔法薬の生成が可能。数百年のマッドとマッドと研究・探究した結果である。

若返りの薬から不老や疑似的な不死に成れる薬の生成が可能であり。真祖になるモノも作れる。

魔法EX

バグって読めません

気功EX

身体能力の上昇、回復力の上昇等が可能。飛ばすもよし纏うもよし溜めこむもよし。外氣まで操るので生存している限り使用可能。

召喚EX

洒落に成らない。

数多の呼び名

体験し経験した人生で得た知識・技能を受け継ぐ

外道知識

理解しては成らないモノたちの知識。対抗する為に人は人で有る事を捨てなければならず。ただ、心を捨てれば奴等の人形に成るだけである。

恐怖を感じ死を感じる。覗くモノの探るモノの暗黒を知るならば、それは暗黒に覗かれている事と同じである。

怠け者

通常時はやる気を出さなければ全てのステータスランク（幸運以外）に-3ランク
闘争時は闘争心を燃やさなければ全ステータスランク（幸運以外）に-2ランク
の補正がかかる。

魅惑の魔力

女性・男性を狂わせる魔力を放出する。または魅了の効果을攻撃に付与する。

万能言語。

鳥・犬・猫等普通の動物・植物と意志疎通が可能。頑張れば石とも話せる。

愛妻家

誕生日、記念日には絶対にプレゼント送っている。

恐妻家

奥さんの方が自力が素で強い。

子煩悩

子供が出来たせいか。父心と母性が強い。でも奥さん狙うような飢鬼は踏みつづす。

無関心

自分に関係なければ、本当に気にしない。子供老人と差別はない。

絶対逃走

逃げる時のみ俊敏がEXになる

■

■

以下略

「幸運Dってなんだよ…」

畜生。てか、色々酷いよコレ。宝具？ 有るけど明記される前にジヤミングしたよ。

「そいえば…生まれから幸運って訳じゃなかったなあ」

あつ、月が見えた

(…………… 入るに入れない)

部屋に入るに入れない男が居たと言う。 因みに共感も出来たと言う。

一話（お久しぶり、アギです）（後書き）

宝具は書いてない。廃スペックにも程がある後は分るね？

書くか書かないかは安価次第。書ききれない固有技能とかもあるから…使う度に更新した方が良いかね？ どうしてこうなった本当に…あつ、イリヤ達はモンハン世界の時の記録を映画感覚でみます。食事の臭いとかはします。血生臭い臭いはしませんし色ごとはカットしてます。教育上悪いからね！！

後、部署移動の辞令が来たので暫く更新は無いかも知れませぬ。

二話（前書き）

休みが欲しい。有給通らん。やつすみがほっしい！！上司が許さん！！

辞職しようにもその後が無いからきつい。明日？ 広島へ行かないといけないんだよ。つまり、寝る。

二話

アギ・スプリングフィールドの朝は早い。この世界に来て三日目、この男に取って興味深いと言うか、知識欲や好奇心を満たす魔術と言うモノを知るのには時間が足りず。眠りについたのが三日目の朝だったのだから、昼前に起きたこの男は早起きのだろう。

幼女を腹の上に乗せていなければ

「イ、イリヤちゃん？ 寝てる人間にフライングボディは淑女としてどうなのかと…」

「ぶうー。だってサマナーが起きないから悪いんだもん。朝も起きなかったし、私が起こさなかったらまだ寝てたでしょう？」

ニコニコと悪気の欠片もない笑顔で行ってくる幼女にアギは思う。

どんな教育をしているんだと

ザクザクと靴が雪に埋まる音がする。此处まで積もったりすると何だかテンションが上がってくる。アギです。

幼女に起こされました。幼女にフライングボディプレスで起こされました。ご褒美だと思った奴、ちよっと変われ。本当にキツイから

「それでね。キリツグったら私が知らないクルミを知ってるから何時も私より多く見つけるんだよ？ ふこうへーだよね！！」

無知が悪いね！！

「…学びなさい。体験しなさい。経験しなさい。積み上げなさい。コレが勝つ為、目標に近づく為の一番の近道ね。」

ははっ、流石にこんな小さな子にストレートには言いませんよ。

思いはするけどね。ホント…気持ちが悪い。まだみぞの辺りに変な重さがある

「ぶうー！！ サマナーもキリツグの味方するの？！ お母様のサ―ヴァントなのに！！」

「その理屈はオカシイ。」

ほっぺを膨らましてプリプリ怒っても愛いだけなんだけどねえ…
そう思いながら、試験管を取りだして中の液体を嚥下する。スツキ
り爽快なレモン風味な元気の出るお薬です。

「…ねえ、サマナー？」

「はいはい、何でしょうか。お姫様」

これくらいの時の子供って可愛いよねえ。家族的な意味で。

「昨日もそれ飲んでたけど美味しいの？」

「んゝ…こんがり肉よりかは美味しくない。でも、普通のフルーツジュースよりは美味しい。飲みたい？」

その一言に

「うん!!」

と、満面の笑みでこたえる姿はこつ…萌えと言うモノが在るよね。

「だが、断る。コレは魔法使い以外が飲むと頭がパァンって成っちゃうからな!!」

「嘘だ!!」

ホントです。

そんな姿を溜息着きで見る衛宮切嗣は、頭を抱えながら頂垂れた。規格外過ぎるイレギュラー…その扱いにである。巧く利用出来れば聖杯戦争を非常に有利に進める事が出来るだろうが、機嫌を損ねれ

ば、一瞬で殺されるかもしれない。

戦わなくとも良いと言う事は知っている。だが、ただ放置しておくには勿体ない上に怖い。

何よりも、自分との相性が言い。セイバーより断然良い。残念でない。もし、サマナーが自分のサーヴァントだったら…

そんな考えが、思いが切嗣の抱える悩みの一つだった。そしてもう一つが

「それでね、山みたいに大きい竜にたった三人で挑んで討伐しちゃうたのよー!」

「…俄かには信じがたい話だよアイリ?」

「それじゃあ、私の記憶を流すから見てみて」

コレである。言葉ではこう言っているが、実際にはやってのけたのだろう。それに、戦争が近い時期にこう言うモノを見るのは出来るだけ避けたい。避けたいのだが…

彼の過去の話はどうにも、心を刺激する。

切嗣は誘惑と妻の積極性に勝てずにアイリスフィールと額をくっつけた。そして、気づく。今の状態のおかしさに。

突然と言って良い出会い

ステータスからして規格外の能力

戦わなくとも言いという答え

令呪の効かない、聖杯戦争に巻き込まれた異界の者

そして、ソレを気づかせたのはサーヴァント召喚の儀を間違って最後に見せてしまったアイリスフィールだった。

そんな事を知らないアギは、冬空の中結界を張ってのんびりとシエスタ中だった。腹の上に幼女が乗っている辺り、この男はそうとう不抜けて居る。

その姿を見て微笑ましいと思うモノは心豊かな人間だろう。その姿をみて嫉妬を覚えるモノはペドフィリアかロリコンだろう。その姿をみて何も思は無いモノは何かが麻痺しているか心の未熟なモノだ。しかし、その姿に驚いたモノは正常だろう。恐怖を覚えたモノは間違いなく正しい価値観の人間だろう。

零下と言う気温の中、宙に浮いて眠る人間等どう見てもおかしい。更に言えばこの少年の様な老人の様な青年の様な人型が寝て居る空間が、人が眠るには快適な気温だったりするのだから、どうしようもない。

才能の無駄遣いにも程が在る。そんな姿を見た衛宮夫妻はこの魔法使いに一言言いたい気持ちに成ったが、魔法使いの腹の上で静かに眠る愛娘を見るとそんな気持ちが吹き飛んでしまうのだった。

（夜だ。）

（はい。死なないでね、アナタ。）

こうして、衛宮切嗣は聖杯戦争開始前から命を掛ける事に成った。

そのまま、その場を後にする。城の中に二人の姿が完全に消えた頃、静かにアギは目を開けた。

「……気づかれたかねえ」

そう言い。試験管を取りだすと、また、中身を一気に嚥下する。

「やだね、やだねえ。世界なんて所詮は流れるモノでしかないのにねえ」

雪風が言葉かき消した。

同時にイリヤがアギの腹から落ちてデコに瘤をこさえた。

「いだーい！！
いったあつグズっ……
いっ！！」

(あつ、こいつはやばい)

泣く。絶対泣く。直ぐ泣くぞ、ほら泣くぞ。

「ああつあああああああつ！！」

「ほおら泣いた？！ 何処打った？ デコ？ 口の中は切ってないか？ ほら、ゆっくりあぐんして！！」

スキル、子煩悩発動中。しばしお待ちください。

.....
(イリヤ慰め中)

.....
(イリヤ高い高い中)

.....
(イリヤ空中飛行中)

..... (イリヤおやつ中)
..... (イリヤ過去体験中)
..... (イリヤ夕食開始)

イリヤ就寝前。 ↑今ここ

「.....疲れた」

いや、ホント疲れた。アレだね、泣く子には勝てんね。子供が居て良かった。経験があつて良かった。茶々丸が恋しい。
つかねえ、あの子見てると自分の子供思いだしてちょっと切なくなる。

初めての子供だったなあ。まあ、死ぬまで現役でハンターやってたし、家族も沢山出来て最後は布団の中で死ねたんだ。親より先に死んだけど.....まあ、俺とゼロの子とは思えないくらいマジメな子だったけどねえ。

いやいや、良く考えたら嫁さん三人には先立たれてるんだった。まあ、幸せ見たいだったから俺にしては上出来でしょう。
んふふ.....やっぱ死にたくはないなあ。死ぬのは怖いなあ。

ねえ、衛宮切嗣？ アルトリア・ペンドラゴン？

「気づいてたか.....と、行っても当たり前かな？ 魔法使い」

「まあね。それよりもマスターは連れてなくて良いのかな？ 知らない所で死んじゃうかもよ？」

「その時はそうなる前に我が剣が貴方を切り裂いて居るでしょう？ サマナー？」

はあ、バレたかな？ 巧く入り込めたと思ったんだけど準備はしとくかね。

二話（後書き）

【ステータス】筋力B + (A++) 耐久B 敏捷B (EX) 魔力
■ ■ 幸運D 宝具EX
こんなステータスでも
怠け者

通常時はやる気を出さなければ全てのステータスランク（幸運以外）
に-3ランク
闘争時は闘争心を燃やさなければ全ステータスランク（幸運以外）
に-2ランク
の補正がかかる。

の所為で実際の所は

【ステータス】筋力D 耐久D 敏捷D 魔力■ ■ 幸運D 宝具
EX

が平時

【ステータス】筋力C 耐久C 敏捷C 魔力■ ■ 幸運D 宝具
EX

が闘争時

と言う使いたくないと言うか、召喚したくないサーヴァントなアギ
四次のサーヴァント勢では最弱？ 五次でも最弱じゃね？ 大技に
しか望みがないとか…俺だったら投げるわこの戦争。

速くウェイバー君を出したい。そしてツツコミにしたい

三話（前書き）

何してんだろうね。 6時には起きないといけないのに

三話

トスンと座った椅子。背凭れにに体重を掛けるとギチツと音が成った。

「それで何かな？ 衛宮切嗣。こんな夜に」

「もう、分ってるんじゃないかな？」

うん。コレばれてる。絶対にばれてる。

「やられたとしか言いようが無いよ。僕は魔術師失格かもしれない。」

「……………」

どうするかねえ

イリヤスフィールは急に寒さを感じ、ベットの中で目を覚ました。最初に気づいたのは一緒に寝ていた両親が居ない事。

こついう事は偶に有るので騒ぐ事ではないが、一つの不満が彼女の中に渦巻いていた。

「…夢、見なかった」

夢である。記憶の整理等ではなく。他人の記憶を見る冒険の夢。見た事も無い幻想の生き物。ソレを狩る人間の命を掛けた物語。本来ならばそんな感じに成る筈の世界観なのだが。実際に見ていたのは、苦勞とネタとギャグと欲にまみれた三流マンガの様な物語だった。時々真面目に活躍するから目が離せない。そして、次を期待してしまふ。昨日は山の様な竜を倒した後にでた報酬やその他の事で稼いだお金を使って食堂を建てると言う所まで見たのだ。

次が凄くみたい。わくわくして堪らない。

この特別製の夢は、本当に温度を感じられるのだ。臭いも感じられる。ピンク色の大猿は臭かった。本当に臭かった。

魚の様な竜の体当たりが絶対に当たって無いだろと言う距離で辺り、アギが大きな蜂の巣に突っ込んだのは笑えた。

「むう」…サマナーったら女の子との約束を破るなんて…酷いんだから!!」

ガーと擬音が出そうな勢いで布団をはぐり、モコモコのウサギの形を模したスリッパをはいて件の人物の元へと向かう。プリプリと怒りながらも、プレゼントされたウサギスリッパを履いている辺りそんなに怒っていないのかもしれない。

子供というのは、意外な所で行動力がある。普通ならそれが怪我に繋がったりと大変なのだが、その足りの事は考えていないと言うのが子供だ。

今回のこのイリヤスフィールの行動は彼女の中では正しい事だった。

所変わり、男二人に騎士鎧を身に纏った少年の様な美少女の三人しかいない部屋では重苦しい空気が流れていた。

男はたがいに無言。騎士は剣を魔法使いに向けたただ佇むのみ。埒が明かないと最初に思ったのは魔法使い…アギだった。

「はあ…順序立てて行こうか。答え合わせだ。賞品は無いけどねえ」

「まず一つ…君自身はサーヴァントの範囲に留まらないが、サーヴァントとしての枷は付いている」

「次は？」

「二つ目、故に君には令呪が効かない訳が無い。」

「…次に行ってみよう」

「三つ目、君は僕達の目の前に現れた瞬間に何かしらの術を使っている」

「種類は？」

「……暗示又は魅了」

衛宮切嗣とアギの会話を聞きながら、セイバーことアルトリア・ペンドラゴンは知らず知らずの内に汗を掻いている事に気づく。涼しげな表情をしているのは男二人だけだ。

（サマナー？ いえ、マスターからの威圧？ これが現代の魔術師の中でも忌み嫌われる男の凄みですか…）

アルトリアは同性と言う事からかアイリスフィールと話す事が多い。話すと言うより話しかけられる、話を聞くと言うのが正しいが。ま

あ、多い。

そんな中に有った自分のマスター、衛宮切嗣の魔術師殺しとしての異名。確信する。自分のマスターは強いと。

ソレに比べてサマナーと言うイレギュラーの魔法使いは強いのか弱いのか分からない。変化が無いのだ。だからこそ、安易に敵対してはいけないと考えるし直感が警戒を鳴らす。

「四つ目は？」

「君のステータスを見てもしやと思った…アイリ・イリヤの記憶も見せて貰ったそれで確信が持てた。」

「何に？」

「君の現在の魔力ランクは無い」

「ちょっと待って下さい！！ サマナーからは確かに魔力を感じます。膨大な魔力…サーヴァントとしての魔力をちゃんと」

「……気を抜くなセイバー。視線を定めろ。死ぬぞ。」

「!？」

「あらら、仲悪いねえ君等。まあ、理由は分るけどねえ。取りあえず。90点だ。使った魔法は魅了じゃなく暗示。心理的な隙を使った瞳術だけだねえ。魔力も何も使わないから気づかれるとは思わなかったわ。それで？ 切嗣ちゃんは何がしたいのかな？」

「僕に協力しろ。魔法薬・技術の提供をしろ。戦えとは言わない。」

セイバーは思う。甘いのではないかと。

「それで？ 俺に何の利益があんの？」

「生命の保証。君には娘も本気で懐いてるからね。」

確かに、本当に令呪が効くのなら一秒でも動かなく出来れば自分の剣で首を切り離す事も胴を上と下に右に左に両断する事は容易い。自然と柄を強く握る。

「生命の保証？ 生命の保証ねえ…ハハ、そりゃあ良く考えないとなあ…笑い事じゃ済まされない」

次の瞬間、私は踏み込み、掬い上げる様にしてサマナーの首に剣を叩き込んだ。

アギ・スプリングフィールドは臆病である。仕方が無い。死ぬのは誰だって怖い。

アギ・スプリングフィールドは子供である。やりたい事はやりたいし。趣味の為に全力を尽くすのは当たり前である。

アギ・スプリングフィールドは大人である。我慢する事も出来るし、

やるからには最後までやる。

アギ・スプリングフィールドは老人である。達観して居るし、諦めると言う事も知っている。

アギ・スプリングフィールドは空っぽであり、常に満たされても居る。

それが、自分の業故に。だから彼はこう答える。

「フザケルナヨ小僧」

鋼がぶつかる音が響いた。風が吹き荒れ、黄金の剣が漆黒より尚暗い黒に染まっている剣に阻まれる。

怖気が奔る魔力が快楽と共に切嗣とセイバーの体を射抜いた。アギからの魔力ではなく、剣からの魔力。

半眼が常だった瞳は鋭く研ぎ澄まされ、見下すような視線になり、飄々としていた雰囲気は吹き飛び氷の様な冷たい威圧感が部屋を満たした。

「百年生きていない小僧が生命の保証？ 面白い冗談だ面白すぎて呪い殺したくなる。相手を見てモノを言え魔術師。」

「ぐっ?!」

切嗣、セイバーは腰から下に力が美味く入らなかった。それもそうだろう、キリツグは自分の一物がいきり立ち性を数回吐きだしたのを自覚する。声を漏らさないだけの自制心を褒めるべきだろう。

魔術防御のクラススキルを持つセイバーも数回達した事を自覚し羞恥に頬を染める。此方もうめき声すら上げなかった騎士精神に感服する。だが、扉の向こうに隠れていたアイリスフィールは痙攣しながらうめき声を上げた。

「アイリ!!」

「アイリスフィール!!」

アギは散歩に行くような雰囲気ですら踏み出した。

殺される。切嗣もセイバーもそう考えた。そう思った

だが、侮ってはいけない。彼女もまた千年の執念が作りだしたモノであり魔術師でも有る。彼女は短く言った。

「サマナー。五秒間動くな!!」

キンと甲高い音を建てて令呪が発動した。赤い帯状の鎖がアギの体を締め付ける。

「セイバー!!」

「承知!!」

再び黄金の剣が迫るも、アギは口元を三日月型に歪めた。

「?!」

ピタリと黄金の剣が止まる。

「セイバー!!」

切嗣の叫びに、掠れそうな声でセイバーが答える。

「出来ません…マスター首元を…」

毒蛇が居た。魔力で形作られた小さく細い毒蛇がひっそりと切嗣とセイバーの首に絡みついていて。そして、いつの間にか壁に切っ先が触れている剣がスツと扉へ、アイリスフィールドの向けられている方へと向けられ、同時にイリヤスフィールドが血相を変えて現れた。

「お母様?! 大丈夫?! ねえ、大丈夫?!」

フツと全ての威圧感が消える。

「ああ、大丈夫大丈夫。」

「サマナー!! お母様どうしちゃったの!!」

アギが扉の前に立ち、優しい声色で言う。

「それがな、俺の薬を勝手に飲んじゃったらしくてなあ。もう処置はしたから大丈夫だ。」

「ホント? 頭パーンって成らない?」

「成らん、成らん。後はお父さんとセイバーに任せて今日は一緒に寝るべや。今日の夢はそうだなあ…初めての古龍戦、これって無理ゲー編からだぞお」

そう言つて、ひょいとイリヤを抱えて自分の後ろを見せる。その頃には切嗣は立ちあがり、セイバーも剣を消して何時も通りの表情をしていた。

「大丈夫だよイリヤ。お母さんはお父さんが見てるから。」

そう切嗣が言つた時には、既にセイバーがアイリスフィールを抱えていた。それを見て漸く安心したのか、イリヤはアギの首に手を回し

「分つた…サマナーお姫様だつこでお部屋まで運ぶのよ!!」

「はいはい、お姫様つと。切嗣、俺は中立。最初に言つただろ?」

「速く!!」

「はいはい」

部屋に残つた切嗣はゆっくりと椅子に座りなおした。

「セイバー…彼を殺せるか?」

「なんとも言えません。あの剣…間違いなく宝具です。」

切嗣は溜息を吐き、アイリスフィールを預かると風呂へ向かった。

（僕は…どうするべきかな?）

三話（後書き）

ステータス更新

魔力ランク―と判明。

何故―なのかは次回で

宝具

魔剣 アスモダイ

効果。魅了効果が有る事が判明。次こそ寝るので詳細は次回で

四話

日も高く成り、雪で覆われた白い大地がキラキラと光を反射する。普段なら子供の騒がしい声が聞こえてきそうなモノだが、此処はアインツベルンの領地でありそんな風景は有りもしなかった。

城の一室でイリヤスフィールは夢を見ていた。楽しい楽しい冒険の夢。迫りくる強大な怪物達を数人人間、ハンターと呼ばれるモノ達が知恵を絞り、死力を尽くし、策を練り様々な道具を使って討伐してゆく。

誰もが懂れる冒険譚。

それを物語として聴くのではなく。それを物語として読むのではなく。音も、臭いも暑さも寒さも感じる事の出来る記録として体験しているのである。

少女の寝顔は笑みで満ちていた。起きないまま、ただ静かに楽しい夢を見ていた。

「…うう…私も食べたい」

失礼。腹は減っているようだ。

薄暗い一室。日の光は厚い布で遮られ、蝋燭と魔力の光が淡く部屋全体を灯していた。

衛宮切嗣、アイリスフィール・フォン・アインツベルンは冷や汗を掻きながら椅子に座り緊張に耐えていた。

誘われたのだ。殺そうとした相手に。誘いに乗らないと言う選択肢はなかった。後ろに控える従者も緊張を隠しきれずにいる。

淡く、淡く光る部屋。その全てが精霊の発する光だと理解した瞬間に三人を襲ったのは絶望に近い何かだった。小さな羽根を持つ小人がティーカップを用意する。半透明な女性が手際よくポットに湯を注ぐ。

鮮やかな紅と金の羽根を持つ鳥が静かに部屋の中央の天井に佇んでいる。

体長5mは有りそうな白い羽を持つトラがテーブルの向こう側に丸くなり、ソレにもたれ掛かる様にして魔法使いは紅茶を飲んでいた。

「飲まないの？」

不思議そうに言う魔法使いに切嗣は返す。

「昨日の事が有るからね…今日もその事なんだろう？」

魔法使いは欠伸まじりに答える。

「アレはアレで終わりだろ？　なあ、魔術師。」

半眼で気力を感じさせない目を眠たそうに擦りながら言う魔法使いに魔術師は自分の体から力が抜けて行くのを感じていた。

（掌の上だった…か。）

「僕は随分と無謀な事をしようとしていたんだね。魔法使い。」

「いやいや、久しぶりよ？　ちゃんと順序立てて答え合わせの出来る奴って。魔術師は頭の回転が速いから嬉しいモノがあるさね。じやあ、俺が何をしたいのかはわかるかな？」

切嗣は目を閉じて深く息を吸い、浅く吐いた。

「昨日のは警告。今回は注意かな？　僕なら即殺だけだね」

「力力、俺もそうする。けど、お前は駄目だ。お前がいなければ戦争は始まらない。ピースが余る。俺って言う欠片が組み込まれちま

う。」

二人は笑顔だ。少年の様に笑いながら話す。

アイリスフィールは何処かやっぱりと思う所が在った。そう思う原因は娘に向ける両者の眼差し。愛情を灯した優しい眼差しだ。性愛では無く、家族を愛する者がする目。自分は切嗣と出会うまで見る事は叶わなかった暖かい瞳。

そして、この二人は悪戯好きなのだ。二人が二人して似た様な事で娘をからかう。下手くそな愛情表現だ。自分も下手くそなのかも知れないが、この二人よりかはマシだ。

アイリスフィールはそう思い、出されたミルクティーに手を出し目を見開いた。直ぐに己の魔術回路を起動し両眼に集中させる。犯人であろう魔法使いはニヤニヤと笑っていた。本当に悪戯が成功した時の様な顔で笑う。時々切嗣がする笑顔だ。

「サマナー…貴方」

「カッカッカ、油断すんなよマスター？ 戦争って言うのはこういう事だ。笑顔で握手しながらもう片方の手には毒塗ナイフが在るのが当たり前だ。もしかしたら本人達ごとミサイルの標的に成ってるかもしれないんだよ。」

「…アイリ、今回は君が悪い。命を狙った相手から出された品を警戒して手を出さないのは当たり前のことだよ。」

と、切嗣はそう言いながら首元を掻き、失笑とも苦笑とも呼べない、なんだかなあといった類の笑みを見せながら言った

「……はあ。そうね。私が迂闊だったわ。でも、サマナー…私が魔術の初歩の初歩を手解きしたのは二日前だったと記憶してるのだけど？」

紅茶に垂らされたミルクが色を変える。当たり前前の事だ、その中で少々白い部分が多くとも普通は気に成らない。

「慣れだろうねえ。元々魔法使いだし。」

「貴方だから納得できるけど…何なのかしらこの気持ち？」

理不尽を感じた怒りです。

「まあ、その辺の事は置いて…騎士王様、どうか剣を下げて欲しいのですが？」

「…貴方は信用できない。昨日の様な事をしておいてその様な事を言いますか！！」

セイバーの怒りは正しいのかもしれない。無理やり数回絶頂に導かれた上に何時の間にか毒蛇をマスターの首元に絡め着かせ、その妻と娘に躊躇なく剣を向ける。

騎士と許せないのだろうし、女の部分も羞恥に怒りを抱いているのだろう。

「最初に言っただじゃん？ アレはアレで終わりだ。蒸し返すな。」

その言葉が信用できない。命までは奪わなくとも悪辣な事をしてく可能性が高い。セイバーはそう考える。考えるが…どうもこの男

の事を嫌いに成れない。

その雰囲気か世話に成った魔術師に似ているからだろうか？

その悪戯が悪辣な所も似ているからだろうか？

飄々とした所も似ているからだろうか？

セイバーには判断が付かない。ソレは呪いの様にセイバーの思考を惑わせる。

だが、と思わせる所がある。

（ああ、そうか。この男はマーリンと似すぎて居る所がある。）

故に、この男の正体が実はあの悪戯好きのお盛んエロ爺とダブルのだ。あの魔術師の助言は正しい事が多かった。己が為に国の為に成る所が多々あった。

ふざけて言う事も多かった。

「セイバー、剣を降ろせ。」

「…了解しました。」

フンと切嗣が鼻を鳴らした。

そして、悪戯小僧の笑みが消えた。

「交渉しよう。僕達が譲歩する立場で君が要求する立場だ。」

にいと魔法使い、アギ・スプリングフィールドが笑みを形作る。非常に憎たらしい顔で笑う。

「さて、俺は中立と要求した筈だけでも？ 他に何かあったかにはや

」？
」

ギリッと拳を握る音が聞こえた。セイバーは思う。この憎たらしさもそっくりだと。

アイリスフィールは思う。憎たらしいと怒りが沸くのを必死に抑え込む。

「…対価はなんだ」

ニタニタと笑みを崩さない魔法使いに、静かに魔術師が言う。

アギは答えない。答えてやらない。笑いながら懷をゆっくりと丹念に探っていく。

魔術師は表情を消したままじっと魔法使いの答えを待ちながら。

どれ程の時間が過ぎただろうか。ゆくつりと風に運ばれる様に洋紙皮がアギの影からふわりと出てくる。

「契約しよう。」

アギのその一言が絶大なる圧力と共に吐きだされる。

先ず最初にアギ・スプリングフィールドは衛宮切嗣、アイリスフィール、セイバー。そして、何処かでこの事を見て居るであろうユーブスタクハイトに対して牽制をした。

イリヤスフィールの命を握ったのである。実際にコレはユーブスタクハイト以外への牽制である。

次に紅茶に簡単だけれど巧妙で強力な魅了の魔術トラップを仕掛け

た。これは、ユーブスタクハイトへのメッセージである。

自分は二日も有ればこの程度は片手間で出来るぞ？　と言う事だ。挑発も兼ねている。

そのおまけとして、切嗣達の不安を増長させる為のモノでも在る。昨夜の攻防とも言えない攻防で自分達の首に絡みついていた毒蛇を思い出させ、印象付ける為のモノでも在る。

実際に、昨夜の攻防で植え付けたモノが蠢きだした。無意識の内に首を撫でる動作がその証拠だった。

植え付けたモノを疑う状況を引き出すが、三つめである。他にも仕掛けて在るぞと思わせるのが目的である。

アギは最初っから切嗣達を嘗めて居ない。掌の上で転がしていると思っても居ない。油断できない相手として見て居る。

最後に、時間を掛けて此方から契約と言う言葉を使う事の出来る状況に持ってくる事がアギの目的であり、契約した瞬間に勝利なのだ。

長い沈黙が在った。切嗣にはアギの言葉にYesと答えるしかない。契約の内容を聞こうにも有無を言わせない圧力が全身に叩きつけ続けられている。

洋紙皮は自分達にも見える様にテーブルの上に置かれているが、何も書かれていない。

何かが書かれていれば良かった。条件が書かれていれば良かった。どんどんと相手から感じる圧力が大きく成っていく。

ソレに反応してセイバーが動こうとするのを静止させ、漸く口を開いた。

「解った。僕が契約する。それで良いんだね？」

魔法使いは契約するのが誰かと言っていない。つまり、誰が相手でも契約の内容は彼自身が決めて変える事も出来ると言う事だ。ユーブスタクハイトにも面子がある。アイリスフィールは吞まれる可能性が高い。自分しかない。セイバーは論外だ。戦争の戦力を辺に縛ることは出来ない。

丁度いいのが自分しかない。

切嗣の返答に満足したのか、強大な圧力が消え本当に嬉しそうにアギが笑った。純粋な少年の様な笑顔だった。

「契約成立」。まあ、気にスナ。はじめだけじめ。さてと、敢えて確認しようか？ この聖杯戦争に俺は参加はするが戦わないOK？」

「了解だ。そして君は僕達に対しては好意的な中立の立場であり、他の参加者にも中立である。…気にいった参加者やサーヴァントには好意的な中立になる。だな？」

「OKOK。…イリヤスフィールは今起きた、夢から覚めた。用意して在る食事を転移させたから後三十分は話せるな。さて、契約の対価は…俺の状況と状態にしておこうか？」

これは好意なのだろう。

「OKだ」

「よし。まあ、簡単に行ってしまうえば俺の魔力が大きすぎて世界が

抑止力を使う一歩手前でした。」

簡単すぎる内容に、茫然としてしまう。理解が追いつかない。
ただ一つの存在の魔力の大きさを抑止が発動する？ O R T等の規格外も居るこの星で？

「あれだ、星は好意的なんだよ基本的には。でもねえ、阿頼耶識で良かったけ？ それは俺の事を危険視するんだわ。まあ、一応俺も人として見られているんだなあ、とちよつと嬉しくなったけども。」

ガイア、アラヤ、魔術師成らば聞き捨てならい事を当たり前の様に行つてのける。

「星が好意的？」

切嗣に続きアイリスフィールが言う

「阿頼耶識が危険視？」

「うん。だから、お互いに妥協するの。俺自身が魔力を極限まで0にする。阿頼耶識が最低限の枷を付ける。だってほら、あれだろ？普通に暮らすのに魔術とか魔法とかはいらない訳よ。俺の今の魔力は一般人の中でも限りなく低く設定してるの。」

余りにも不利に見える条件に見える。本来の力の大半を封じる事で封じられる事でこの世界にいる。何が魔法使いをそうさせるのだろうか？ セイバーを含み三人はそう思った。

「まあ、その所為で宝具？ 宝具で良いのか？ うん、もう宝具で良いか。ソレに久しぶりに魔力全力供給してるから、なんか物凄く

張ってる。うん。」

その言葉で、昨夜出て来た剣を思い出す。

「あの剣が…アレは凄かった。」

「ええ…ホントに凄かったわ。」

「…凄かったです。」

思いだして、酷い事に成った事に物凄く残念な気持ちにさせられる三人だった。

「そんなとこだよ。さて、最初に言っておこう衛宮切嗣。俺はこの戦争を聖杯を運ぶモノに成り済ます。中立的な運び屋になる。勿論、周りも知っての通りそいつがどんな者だろうと勝者に聖杯を渡す役だ。これなら、アインツベルンも納得するだろう。」

「?! …そう言う事かい？ 僕には何の枷にも成らないね。了解した」

切嗣からすればアイリスフィールへの危険性が少し減る分、良い事では在った。

「それじゃあ、これくらいいところか？ 娘に合って来な。コレが最後とは言わないけども少しでも構っておけ。」

「言われるまでもないさ。ありがとう」

カタリと音を立てて立ちあがる。

その後ろ姿に魔法使いが声を掛ける。

「イリヤの食事にこんがり肉G余分に置いてるから食べて良いよお」

ダッ!!

約二名がダッシュした。

「アレが騎士王とか信じたくないなあ……」

元英国人として

四話（後書き）

アギの宝具説明

いる

いない

どっち？

多い方で

五話

夢を見る。

燃え盛る村があった。炎を避けながら逃げる少年が居た。

悪魔、そうとしか呼べない絶望が現れる。

（これは…サマナー？）

悪魔は何かを考え、一つの指輪を渡した。

時が過ぎた。

（まさか？！　こんなにはつきりと！！）

アイリスフィールは気づく。これは自身のサーヴァントの過去だと。冒険活劇の様な楽しい過去ではなく。最初の、まだ幼かった頃のサマナー…アギ・スプリングフィールドの記憶だと。

少年は一人だった。好んで一人なって行つた。

人が怖いと少年は心の内で叫ぶ。

ソレに誰もが気づかない。気づかせない。

好きに成った人に裏切られた。

心に仮面を被せて、体にさえ己を守る違うモノを被せた。

少年は小さな精霊に名を与えた。理性無き下級悪魔に名を与えた。精霊と悪魔は少年に感謝し生きる事を知り、少年を愛した。

時が経った。

少年は幼いまま教師になった。親しい友人が出来た。尊敬できる魔法使いと杯を交わした。

少年は常に権力と謀略に巻き込まれた。そして、それを打ち破り、回避し反撃し撃退した。

少年は世界すら騙し通して、愛するモノを愛してくれるパートナーを得た。

ハッピーエンドだ。

（幸せなおとぎ話みたい…ね。）

場面が変わる。

（戻った？ 何故？）

悪魔王が火炎を吐きだした。声が聞こえる。夢を見ている自分に声が聞こえる。

『アスモダイ、アスモデウス、アエーシュマ、好きなのでどうぞ』

有名な罪が其処に居た。悪魔も恐れる侯爵が居た。

東洋の悪鬼が現れる。拳を握り悪魔王を打つ。

大罪が一柱も負けまいと拳を振るい、鬼を打つ。

精霊が駆ける。風が吹き荒び轟雷が猛り狂う。絶対零度が壁を作り、小さな大樹が新たな命を生み出す。

少年が叫ぶ。それは呪文だった。魔術師ならば、召喚魔術を知るモノならば誰もが知る有名な文だ。

『我は全能の神の力を得て、ここに何時を呼び出す。』

（嘘…サマナーは本当に？ 継いだというの？ 血縁も何もない者がそんな神秘を継いだの？）

そして、われはバラメンシス、ポーマキエ、アポロセデス、最も強力なる王子ゲニオとリアキデ。

タートルスの玉座の大臣たち第九天のアポロギアの玉座の王子たちの名と力を借り、此処に創造す。

偉大なる主なる神ゼバオトよ。創造を許し給え、怖ろしい鉄の神剣を創造する事を許し給え。

神命を受け、王命となりし剣よ。我を糧とし此処に現れよ。汝は名を刻む刻銘の剣。

聖魔の分別を知る偉大な力也

（継いだ？ 違う…これは…）

王命の剣

（打ち破った?!）

意識が薄れて行く中、アイリスフィールはアギ・スプリングフィールドの姿を見る。

自身の血に濡れた腕をだらんと下げるその姿を。

エツチラオツチラと満身創痍の人間の様に情けなく、必死に歩く姿を。

その存在を示す、大いなる剣を悪魔王に突き刺すその姿を。

（…綺麗）

泥に塗れ、血に濡れて、果たすのは生きるという事。仲間を守ると言う事、助けると言う事。

英雄だ。この場面だけ、アギ・スプリングフィールドは英雄になったのだ。偉大なる王の封印さえ打ち破り、神の加護さえ打ち破り、彼は継いだモノを乗り越え打ち破り完全に己のモノにしたのだ。

意識が消えて行く。愛しい家族が呼ぶ声が聞こえる。

（まって!! あと少し、もう少しだけ見せて!!）

悪魔王を貫いた剣が、その存在を更に強大なモノにする。

（後少し、もう…ちょっと…）

聞こえない、声が聞こえない。景色も良く見えない。だけど、確かに聞こえた言葉があった。

『運命なんて糞喰らえだ。』

（ああ、貴方はなんて強いのかしら…召喚王）

意識が覚醒してしまう。ゆっくりと開けた瞳に映ったのは興奮気味の娘と、どこか嬉しそうな夫の姿だった。

「おはようイリヤ、あなた。」

「おはようお母様…！」

「おはよう、アイリ。君はどんな夢を見たのか？」

夫の言葉に私はこう答えるしかない。

「…とても強い英雄の夢よ。とてもとても狡賢くて、努力家で諦めなかった小さな小さな英雄の夢。」

「…そうか…僕の見た夢とは違うな」

「私は外宇宙からの侵略!!」

(なにそれすごくこわい)

自分の娘は将来大物になると思った夫婦だった。

朝食が始まる。家族とメイドしか居ない食堂での食事。普段と変わらない味、変わらない量、変わらない温かさ。

それが、お気に召さないのか我が家のお姫様達は少し進みが遅い。

(はぁ、魔法使い。すこし怨むよ?)

僕は心の内でそう思う。今頃、無理やり剣の稽古をされているだろう魔法使いの事を少し不憫に思いながらもざまあみると考える。

セイバーとサマナーの日常での力関係はセイバーが優勢のようだ。なんでも、嫁さんに似てる所が在る。と言う事らしい。我が強いだけの様な気もする。

そんな姿の二人を見るとどちらも年相応の人間に見え、余計に嫌悪感と苛立ちが募る。これ以上サーヴァントとの間に溝を作りたくないのが本心だが…本格的に騎士王とは合わない。

恐らく、騎士王関連の騎士の殆どと気が合わないだろう。

(何故、気づかない…気づこうとしないんだ)

王も臣下も何故気づこうとしない!!

アレは唯の人間だった。唯の少女だ、少し責任感の強い人間だった。苛立ちが積もり嫌悪感が心を満たす。

ああ、そうだ。僕が気づかせればソレが一番良いのだろう。それは出来ない。僕には出来ない。間違いたらけを信じ続ける様な、聖杯に望みを見出した僕のような人間が言っても余計溝が深まるだけだ。

「あなた？」

「なんでもない。…ただ…」

「ただ？」

「昨日食べた骨付き肉の方が美味しかったと思ってね？」

僕はアイリにそう言う。笑顔をでそう言う。そう言っで誤魔化した。家族の前ではこんな感情を持つて居たくない。

食事を食べ終え、僕は少しの時間イリヤと散歩に出かける事にした。本当ならアイリも一緒にと思っただが、今の内に調べたい事が在るらしく工房へ向かった。

白い道に足跡を付けながら娘と一緒に歩く。こんな毎日がずっと続けば良いと思う。でもそれは今更な話だ。

イリヤは表情をイロイロな表情を作り夢の話をする。魔法使いの昔話だ。娘は本当に彼の事がお気に入りらしい。

もし、もしもだ。僕とアイリが戦争に負けて死んでしまったら…イリヤはどうなるだろう？

次の戦争への布石にされる事は絶対だ。この子も聖杯なのだ。戦争は60年周期で行われる。その頃にこの子の資質を受け継ぎより優秀な器が生まれて居るかも知れない。

それまで、この娘は子を生む装置として扱われるかもしれない。

勿論、死ぬつもりも負けるつもりもない

今は平凡で楽しい一時を過ごそう。来週までには日本に行かなければならない。

「貴方は！！ ヤル気が！！ 在るのですか！！」

「無理やり稽古に拉致したくせにヤル気なんて在る訳無いじゃないですかー」

ヤダーと悲鳴の様なからかっているの様な声が聞こえ、自然と僕は顔がほころんだ。

今は楽しい一時を過ごそう。うん。

腹が立つ。唯一人の存在に腹が立つ。契約に縛られたのはマスターだった。私でもなくアイリスフィールでもなくアインツベルンでもなく。衛宮切嗣唯一人を狙って行われた。契約の内容は『白紙』だ。これがどれ程の重圧に成るかこの男は知ってワラウのだ。

その捻子曲がった性根に腹が立つ。そして、それ以外ではそうでもないこの男を信じてしまいそんな自分に腹が立つ。

私が振るう剛剣は男の剣を弾く。弾くだけ飛ばせない。ソレにも腹が立つ。

この男は、魔法使いは剣を扱うと言う事を知っている。力の制の仕方を知っている。

小手先の技術ばかりが見える。基本も出来ている。綺麗な太刀筋だ。剣だけを合わせれば若き騎士を相手にしている様な感じさえしてくる。

口で文句を言いながらも体を動かしている。

疲れた様子も見えない。

（こんなにも綺麗な太刀筋をしているのに、この者はあんなに捻子

くれて居るのでしょうか)

そう思ってしまう。

剣は正直だ。その太刀筋や重さで全ての修練が現れる。例え手加減していても感じ取れる。

「貴方は!! ヤル気が!! 在るのですか!!」

だから、私はこの男を信じてしまいそうになる。だから、苛立つてしまう。

「無理やり稽古に拉致したくせにヤル気なんて在る訳無いじゃないですか」

(ええそうです。これはただの八つ当たりです)

不甲斐無い自分。マスターの窮地に何も出来ない自分。罨に嵌められた自分。マスターと解り合えない自分。

ソレに対して、マスター達を罨に嵌めたサマナー。マスター達と中の良いサマナー。

自分に創けない関係を持つサマナー。

それが、あの言葉を思い出させる。おっはひとのこわあがない

それが、堪らなく羨ましい。

「ハアアアア!!」

「ちょ?!」

バキン、鉄の剣が折れた。

冷や汗が止まりません。アギです。

どうやら、いろいろとやり過ぎたらしく。騎士王様がご乱心されました。半ばで折れた剣が物凄く怖いです。

ええ、右腕と言うか両腕が痺れております。これは逃げても良いよね？

だいたい、最初から付き合わなければいい？ 無理言うなよ。怒ったエヴァさんそっくりな雰囲気で付き合いなさいとか言われたから条件反射で逃げ出したよ。逃げ出した瞬間に襟首捕まえられたよ。魔力が略無いのも考えモノだね！！

「私は…貴方が解らない」

「そりやそうでしょ？ 俺は騎士王様じゃないし、騎士王様も俺じやねえもん。」

何を当たり前な事を言ってるだコイツ。馬鹿じゃねえの？

「貴方の剣は綺麗だ。でも貴方は捻子くれている…私は…貴方を信用できない。」

チャキツと剣を、訓練用じゃなくて宝具の方を俺に付きつけてくる。どう、答えると？

「それで良いんじゃない？俺は貴女を助けない。切嗣もアイリスフィールもイリヤスフィールも助けない。直接手をくださない。俺は中立と言った。あんたが俺を信じようが信じなかるうが。どうでも良いんだよ」

最初に言っただじゃないの、ねえ？まあ、ちよつとは助言ぐらいはしてあげても良いよ？位には好意的だけでもねえ。

「なら、貴方は何故聖杯戦争に出るのですか？！素性を隠し、聖杯も求めない！！貴方にとって何の益も無い筈だ！！」

「…ハア。騎士王様、アンタは今のブリテンをイギリスを旅行できると言っただけですか？」

「それは…見てみたいですが。それとこれとは話が違います。」

「同じだよ。俺からすりゃ同じだ。ただ見てみたい。興味が在る。アインツベルンの願いへの足がかり。その儀式。どんな術式を組んだのか？どんな要素を取り込んだのか？ソレが見たい、知りたい、理解したい！！」

ホント興味が尽きない。大聖杯、小聖杯。どちらも素敵だ。素敵過ぎて直ぐにでも調べたい。

「解るかな騎士王？万能の願望器！！その危険性！！その有用性！！たとえば、万能で無いとしても、その機能は素晴らしい！！ソレを知りたくて識りたくて堪らないんだ！！」

俺の言葉に騎士王様はポカーンとしている。失礼な王様だ。

「あ、貴方それだけの為に、力の大半以上を封じてまでこの世界に居るのですか？」

「失礼な！！ 後、日本食も久しぶりに食べたい。具体的に言うとかぶ刺しとか寿司とか岩魚とかニジマスの塩焼きとか…後、煮つ転がしとかも食べたい。」

後、この時代の日本なら伝説のクソゲーとかも在る筈だから今の内買って置きたいし

「…なんだか、私が凄く惨めに思えてきました。」

「人それぞれだよね。戦争に参加する理由なんてさ。どんだけ綺麗事並べようが様は自己満足だ。綺麗、醜い、正悪、聖邪、どれもこれも人間が勝手に決めた事だ。社会が決めた事だ。ケチ付けてたら一生かかってでも終わらねえよ。」

「今の言葉は、聞かなかった事にします。ソレは全ての英雄に喧嘩を売っている様なモノです。気をつけなさいサマナー…今日は済みませんでした。私もまだまだ未熟です。」

「あいあい、まあ、戦争頑張っただけ。遠くから近くで見てるよ。」

お互いその場を後にする。

あゝあ、騎士王様はいかんね。真面目過ぎる。ありゃ駄目だ。切嗣

とは絶対に合わない。見当違いの方を向いてるわ。

どんな、結末になるかねえ…まあ、俺も積極的に干渉するつもりもないから5次に繋がるんだろうさ…

「まあ、…最後は大団円を迎えたいモノだけどもねえ」

アイリスフィールは自身の工房で昔習った事の復習をしていた。召喚術を行うならば最初に知るであろう偉大なる先達。ソロモン王。ソロモンの小さな鍵、レメトゲン、ゲーティアの写本。出来ればソロモンの大いなる鍵の七冊も見たいがどれも英国…協会に抑えられていて読める様なモノでは無い。

劣化した写本では意味がないのだ。

それでも、確認が取れる部分が在るだけマシなのだろう。

「…ああ、やつぱり。」

サマナーはソロモンだ。ソロモンを継いだモノだ。そして超えたモノだ。

あの、ロード・オブ・ソロモンを
偉大なる予言者、偉大なる知恵を授かった王。恐ろしき召喚術師。
怖れるべき召喚王を超えたモノだ。

ソロモンの後継。彼が使役した悪魔も天使も余すことなく召喚し使

いこなすのだろう。

彼の者が使役出来なかった者達までもを使役してしまうのだろう。一冊の魔導書…と言っても余白だらけでサーヴァントのステータスと詳細しか乗らないモノだけれど開いてみれば更新されていた。そして余白部分が黒く塗りつぶされていた。唯一読める部分を確認する。

サーヴァントの過去を知った事により、ステータスが更新されました。宝具級の詳細が一部解放されました。

宝具の詳細が一部解放されました。

絆が結ばれました。

サーヴァントからフィードバックが有ります。

「…これも彼の影響なのかしら？」

随分と丁寧になっているというか、最初の文が現れ直ぐに消えた。

【鬼神召喚（杯の盟友）】

東洋の幻想種である鬼のみを召喚出来る召喚術。
嘗てより、杯を交わし盟約を結びし鬼とその一族の召喚が可能。
遙か昔、人々の闇への恐怖が具現化したモノ達を従える事ができ、
人が闇への恐怖を忘れぬ限り如何なる世界でも使用する事が出来る。
同時に、人に益を齎す守護者としての信仰がある限り如何なる世界
であろうと召喚する事が出来る。人が人以外の何かに恐怖し、感謝
する思いが有る限り使用し続けられる。

【守護悪魔の絆（朽ち果てぬ守護者）】

四体の守護悪魔を召喚する為の召喚術。
忠誠を誓い、親愛を持ち、命すら捧げる事の出来る最初の守護者を
同時に呼び出す事が出来る。
アギ・スプリングフィールドの存在が有る限り、冥府・地獄から呼
び出す事が可能。その為、何度倒そうとも再召喚された瞬間に完全
な姿で現れる。

【魔剣・アスモデウス（絶頂恥死）】

大罪が一、好色の悪魔王の名と力を具現化した一級の魔剣。
この世に生物が居る限り有り続ける不浄の剣であり、牡の象徴でも
ある。

男性・女性・関係無くその欲求を最大に引き出しそれ以外を考えれ
なくする程の欲の塊。
その魔力の影響を受けると、強制的に達してしまう。
凡庸性もあるが、使用時、己の好色を完全に制御できなければ使用
できない。制御できなければ己も精を吐きだし続け死に至る。

もつとも優しく、もつとも使いやすい能力も持つ残念な魔剣

「…最後ので台無しのような」

アイリスフィリールはなんとも言えない気持ちになり、ページを捲り確信を確かなモノにする

宝具

【ソロモンの指輪】

召喚器であると同時に、発動体としての役割も持つ鉄と真鍮で出来た指輪。

【王命の剣】

C…混沌に属するモノ、混沌を併せ持つモノを服従させる鉄の剣。刺されればその名を抑えられ使用者の思う通りに消滅か隷属させるかを刻みこめる。絶対の剣。

いかな悪魔も悪人もこの効果から逃れる事は出来ず。反抗の意思があれば無えと帰す事が可能。

使用者が使う気はないので、二桁も使われていない。

混沌を持たないモノ、中立・善・中庸、や秩序・善・中庸の者には
唯の凄い神秘を内包した剣でしかない。

対人、対魔宝具。 レンジ 一人 威力 EX

【■■■■】

「宝具級に宝具…」

頭が痛くなった。説明を見て後悔する。文を見て解ってしまった。
アレだけじゃないのだ。宝具級能力はアレだけでは無い。アレが
一番優しいモノなのだ。

「宝具は…一部読めないけど、また使いどころが難しいわね。はあ」

彼が戦いには参加しない事が嬉しい様な惜しい様な変な気に成って
しまう。

普段の彼をサマナーを見て居ると、息子というかなんだか家族の一
員の様に感じてしまうのだ。娘は兄の様に感じているのかもしれない。
い。

夫は友人の様に感じている節がある。
たまたま、会話を聞いてしまったのだ。

「フラッシュ・グレネードねえ。」

「君の時代にも普通に在っただろう？ 略同じぐらいなんだから」

「いや、そうじゃなくて。これだけじゃ面白くないからさあ、コレに魔術で烈光と目くらまし付与した方が言いべ？ 宝石魔術っての使えばその辺の屑宝石でも簡単じゃん。」

「その発想は無かった。」

切嗣―、装備品色々と改造しようぜ―

等と、子供の様に話すあの二人は親友の様だった。ちょっと嫉妬したのは秘密だ。

こんな日が長く続けば幸せなのだろう。でもソレは望めない。私は決めたのだから、思ったのだから。

「ごめんね、イリヤ…」

様々な思いが擦れ違い、捻子くれて一つの場所へと向かう。

一週間後、彼等は日本の地に足を付けて居た。

五話（後書き）

もうね。これはヒドイで行こうと思う。思いついたままに書く。このシリーズは考えちゃだめなんだよ。キット。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9833x/>

Fate/zeroにつっこんでみた

2011年11月14日22時26分発行